

## 「放蕩息子」のたとえ

ルカによる福音 15:1-3、11-32

(そのとき、) 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。

「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。

『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠り

なさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』』

## 説教

登場人物を整理してみます。

せりふ有り：父、兄、弟、しもべ

せりふ無し：弟を雇ったある人、食べ物をくれない人たち

わたしの「ひと言感想」はこうです。

父、こういう太っ腹な人になりたいなあ、あこがれる。

弟、あこがれはしないけれど、自分も似たようなものだ。

兄、自分だけいい子ぶっちゃって、ああはなりたくないな。

しもべ、話の中では地味だけど、けっこうこれが自分なのかもしれないな。

弟を雇ったある人、安くこき使ういやな雇い主だけど、けっこうざらにいるよ。

食べ物をくれない人たち、そりゃあたりまえで考えてみれば自分もそうだよな。

たとえ話を聞いてなにを感じるか、それは人それぞれに違うでしょうし、登

場人物のなかで好き嫌いが分かれるのは人それぞれだとおもいます。このたとえを自分には関係ない話として聞き流すこともできますし、またこの弟を自分のことのようにおもい涙を流す人もいるでしょう。

**徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。15:1**

このたとえ話は徴税人や罪人にむけの話かとおもいきや、実はそうではない、不平をつぶやく、苦情をいいたしたファリサイ派の人々や律法学者たち向けの話なんだという解釈があります。

**すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平をいいたした。そこで、イエスは次のたとえを話された。15:2-3**

ここに注目するとイエスは不平をつぶやいたファリサイ派の人々や律法学者たちに向かってこのたとえを話された、ということになります。

いっけんすると放蕩息子の弟が主人公のこのたとえ話ですが、この見方でいえば主人公はまじめな兄？ということになります。ファリサイ派の人々や律法学者たちは父なる神のいいつけを守る、つまり律法を守ることに熱心だった人たちです。兄も同じように父のいいつけを守り、くる日もくる日もまじめに野良仕事をしています。たとえ話のなかでははっきりしませんが、毎日、楽しく働いていたのかもしれないし、いやいや働いていたのかもしれない。そしてこの線で深読み、先読みすれば、神に熱心に従うだけではまだ足りなくて、罪びとを裁くのではなく赦すことが大切だ、という解釈もできます。兄は父のいいつけどおりに働いてきました。そして遊び人の弟を赦すことができずプンプンしているところを、に父に慰めらる？諭される？ところでたとえは終わりになっていることから読み取れます。

このあいだある人と話をしていたら、彼はお金を使えば使った分だけ財布にはいってくると思っていたというのです。そいつはすばらしいことだとわたしが相槌をうつと、でもそうじゃないことがわかった、と彼は話を続けます。どうして？と話を向けたのですが、そのときはそれで話は終わりました。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』 15:25-27

このしもべが見て理解した光景はさっきの話でいえば、空の財布にまたお金がはいったような状態です。父は息子の姿を見るや否や一番良い服を着せ、指輪を与え、靴をはかせ、牛をつぶして宴会を開きました。なんで、なんで、と??? (はてな) がいくつも頭の中を駆け巡りますが、このたとえはこういう不思議な話というか、打ち出の小槌のような話でもあるのです。弟からすれば雇い人でもいいと思って実家に帰ってきたら大歓迎された、兄からすればもう遊びに金を遣って無一文の弟にまた父は金を無条件で与えている。神のめぐみとは空の財布にお金をいれてくれることなのか、そしてその財布が大きければおおきいほどたくさんお金をいれてくれるものなののでしょうか。罪を悔い改めればご褒美をくれるのが神さまでしょうか。神の目から見たわたしたちの財布とはどんなもので、そしてそれにはなにをいれてくれるのでしょうか。今日のわたしたちはなにを神に望んでいるのでしょうか。そしてその望みはかなうのでしょうか。きょうの福音では弟にとって父の元に帰ることが救いとなったことを伝えています。きょうのたとえが教えるわたしたちにとっての福音とはなにを意味しているのでしょうか。正解があるわけではありません。どうぞイエスさまのたとえに応えてそれぞれに思いをめぐらせて受け止めてください。

-----